

エッブスの時を超えた外延の同一性という考えについて

横山 幹子*

On Ebbs's Idea of Sameness of Extension across Time

Mikiko YOKOYAMA

抄録

われわれが知識を共有することと語の外延をどう理解するかということには密接な関係がある。ゲーリー・エッブスは、『時を超えた外延の同一性という考えそのもの』の中で、形而上学的原則(M)(語の使用がその外延を決定するというテーゼ)が時を超えて外延が同じであるという実践的な判断と矛盾することを指摘し、(M)を捨て時を超えて外延が同じであるという実践的な判断を受け入れることを提案する。彼によれば、外延が同じであると理解することは、主張することや主張を評価することなどのわれわれの現実の言語的实践と深く結びついており、お互いの語を顔面通り受け取ることは、これらの実践の欠くことのできない部分なのである。この論文では、このエッブスの時を超えた外延の同一性という考えについて考察する。そのため、まず、エッブスの考えがどのようなものかを確認する。次に、彼の考えには係争点に関して何が常識かという問題があることを指摘する。それから、その問題にもかかわらず、彼の考えは論争の共通基盤を求めるという点で妥当すると論じる。そして最後に、その考えをさらに発展させるためには常識の問題に対する態度はどのようなものになりうるかを素描する。

Abstract

The concept of knowledge sharing is closely related with how we understand the extensions of our words. Gary Ebbs points out in "The Very Idea of Sameness of Extension across Time" that the metaphysical principle (M) (The thesis that the use of a word determines its extension) is incompatible with our practical judgments of sameness of extension across time. He proposes that we abandon (M) and trust our practical judgments of sameness of extension across time. According to his theory, our grasp of sameness of extension is greatly connected with our actual linguistic practices of making and evaluating assertions etc. and an integral part of these practices is to take each other's words at face value. This article examines Ebbs's idea of sameness of extension across time. First, I will review Ebbs's idea. Next, I will point out that there is a problem in definition of what is common sense about disputed points. Then, I will argue that in spite of this problem, his argument is valid because of the search for common ground. Finally, I will outline what the attitude towards the problem of common sense should be like in order to develop the argument further.

* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科
Graduate School of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba

1. はじめに

われわれは、書物を読むことによって何らかの知識¹を得ることができると考えている。たとえば、われわれが〈浅野は水に砂糖を入れたものを冷やし水として売った〉²という文を読んだとしたら、そのことによって、われわれはその文によって表されている内容を知識として得たのだと考える。そして、書物を読むことによって知識が得られると考えられるかどうかは、普通は、その書物が現代において書かれたものなのか、それとも、過去において書かれたものなのかに依存しない。また、そのことは、書物の中に書かれていることが現在のことなのか、それとも、過去のことなのかにも依存しない。もちろん、そこに書かれている内容が正しい知識なのか間違った知識なのかという問題は常にある。そして、知識の真偽は、その書物が書かれた時代や書かれていることが適用される時代に依存しているかもしれない。しかし、いずれにせよ、われわれは、自分たちが書物に書かれていることを理解することができ、そのことによって、その真偽はともかく、何らかの知識を得ることができると考えているのである。そのうえ、そのことは、狭い意味での書物だけでなく書かれたもの一般に当てはまると考えられているのである。

では、なぜそのようなことが可能だと考えられるのだろうか。先の〈浅野は水に砂糖を入れたものを冷やし水として売った〉という文の場合を考えてみよう。この場合、われわれがその文によって表されている内容を知識として得るためには、まず、その文の内容を理解できなければならない。そして、その文の内容を理解するためには、その文の中に出てくる語の指示するもの、すなわち、外延が何であるかを知らなければならない。つまり、その文の〈浅野〉や〈水〉や〈砂糖〉の外延が、われわれが〈浅野〉や〈水〉や〈砂糖〉と呼んでいるものの外延と同じであると考えなければならない。両者の外延が同じものであると考えることによって、われわれは、〈浅野は水に砂糖を入れたものを冷やし水として売った〉という文の内容を理解できるのである。もちろん、後に、書物の中で〈砂糖〉と言われていたものが、実は砂糖ではなく人工甘味料であったことが明らかになるかもしれない。そして、そのときは、〈浅野は水に砂糖を入れたものを冷やし水として売った〉という文を読むことによって得た知識は間違った知識になり、その文によってなされた主張にわれわれが同意しないということが起こりうるかもしれない。けれども、そのことは次

の段階であり、ある主張に同意したりしなかったりするためにはまず最初の段階として語の外延が同じであるという前提が必要である。そのように考えるならば、書物を読み、その書物に書かれている内容を知識として得るためには、少なくとも、その中に出てくる語の外延を同じものとして扱おうという合意が必要だということになるのである。

上記のような考え方は、ゲーリー・エップスが『真理と間理論的な術語』³で述べているように、パトナムの考え⁴の中に見て取れるものである。そのように、われわれが書物に書かれている内容を知識として得ていると言えるためにその中に出てくる語の外延を同じものとして扱おうという合意が必要だとするならば、そして、そのことを認めたくえでそのような仕方での書物による知識の獲得を当たり前のこととして認めたいならば、語の外延が同じであるという概念の精察が必要になる。また、われわれの読む書物に書かれていることは、それが過去に書かれたものであれ現代に書かれたものであれ、過去のことであることが多い。少なくとも、過去についての知識は、われわれが書物に求めるものの一つであるだろう。そこで、この論文では、われわれが過去の主張に同意したりしなかったりできるためには時を超えて語の外延が同じであることが必要であるという考えを背景に、時を超えて語の外延が同じであるという判断を持ち続けるためにはどのような考えを捨てなければならないかについて論じたエップスの論文『時を超えた外延の同一性という考えそのもの』⁵を中心に、彼の他の論文や、クワイン、デイヴィッドソン、パトナムの考えを参照しながら、時を超えて語の外延が同じであるという考えについて論じたい。そのため、私は、まず、時を超えて外延が同じであるという判断を持ち続けるためには語の使用がその語の外延を決定するという形而上学的原則(M)を捨てなければならないというエップスの議論を詳しく見ることから始める。そして、その議論の背景となっている〈同意・不同意のためには外延が同じであるという実践的な判断が必要である〉という考えがどのようなものかを確認する。そのように彼の議論を整理し、その議論の構造を明らかにしたうえで、彼の考えのどこに問題があるのかを指摘する。次に、それらの問題にもかかわらず、彼の考えには、問題を論争相手との異論が少ないところへ持っていき同じ出発点から物事を考えようという重要な視点があることを指摘する。そして最後に、そのような考えを発展させるためには、先の問題に対してどのような態度をとるべきかを素描する。

2. 時を超えた外延の同一性についてのエッブスの考え⁶

2.1 『時を超えた外延の同一性という考えそのもの』におけるエッブスの目的

エッブスはその論文『時を超えた外延の同一性という考えそのもの』の中で、時を超えて語の外延が同じであるという考えについて論じている。そこで、彼は、まず、所与の時に外延が同じであるという実践的な判断 (a practical judgment of sameness of extension at a given time) と時を超えて外延が同じであるという実践的な判断 (a practical judgment of sameness of extension across time)⁷ がそれぞれどのようなものを規定することから始める。そして、思考実験により、後者がある形而上学的原則と矛盾することを示す。彼によれば、「その形而上学的原則とは、語の使用がその外延を決定するというもの (M) であり、そこでは、語の『使用』は、w が生じる文を発話する話者の t の時点における言語的傾向性や心的状態、それらの話者が t の時点において因果的に関係づけられる事物の物的構成、t の時点の話者相互の非意味論的關係、t の時点でそれらの話者が t 以前に w を使った話者に対して持つ非意味論的な関係、これら以前の話者たちが因果的に関係づけられていた事物の物的構成を含むものと考えられる」⁸。この矛盾に関して、彼は、多くの場合は実践的な判断の方が捨てられるが、そのように実践的な判断を捨てることは、時を超えて外延が同じであるというまさにその考えを理解できないものにする主張する。そして、所与の時に外延が同じであるという実践的な判断と矛盾するという理由で個人主義を拒否するなら、時を超えて外延が同じであるという実践的な判断と矛盾するという理由で (M) を拒否すべきだと論じ、(M) を捨て実践的な判断を受け入れることを推奨するのである。

2.2 外延が同じであるという実践的な判断

では、エッブスの言う、所与の時に外延が同じであるという実践的な判断および時を超えて外延が同じであるという実践的な判断とはどのようなものなのだろうか。彼によれば、「同じ自然言語の話者は、お互いの語を額面通り受け取り、自分たちがそうすることが正当化されるかどうかを特別に尋ねることはない」⁹。たとえば、あなたが私に指輪を見せて〈この指輪は金だ〉と言うなら、私はあなたがその指輪が金だと主張したと考え、そうすることが正当化されるかどうかなど考えない。われわれは無反省で実践的やり方で、あなたの語〈金〉の外

延 (あなたの〈金〉という語がそれについて真であるものの集合) が、私の語〈金〉の外延と同じであると判断する。彼は、このような判断を、所与の時に外延が同じであるという実践的な判断と呼ぶ。そして、このように額面通り受け取ることは、時を超えても当てはまると考える。たとえば、1650年に宝石商がジョン・ロックに指輪を示して〈この指輪は金だ〉と言ったと学ぶなら、われわれはその宝石商がその指輪が金だと主張したと考え、無反省で実践的やり方で、宝石商の〈金〉という語の外延がわれわれの〈金〉という語の外延と同じであると判断する。彼は、このような判断を、時を超えて外延が同じであるという実践的な判断と呼ぶのである。

ここで重要なのは、〈お互いの語を額面通り受け取ること〉である。エッブスによれば、われわれが外延が同じであるという実践的判断をしているというのは、外延が何を意味するかを知っているとか、外延が同じであることについて常にはっきりと判断しているとかいうことではない。彼によれば、同じ言語の話者の語を額面通り受け取っているというわれわれの無反省な実践の中に、外延が同じであるという判断が含まれている。話者の語を額面通り受け取るとは、引用解除パターン (E) (x が $_$ であるときのみ、' $_$ ' は x について真である) を適用しているということであり、引用解除パターン (E) を適用しているということは、外延が同じであると判断しているということなのである。このようにして、外延が同じであるという実践的な判断は、たとえば (M) のような、どのようにして外延を決定するかについての理論にコミットすることなく表されることができる。彼は次のように言っている。「引用解除のパターン (E) をわれわれ自身の語に適用する能力を他の日本語の話者の語を額面通り受け取る無反省な実践と結びつけることによって、われわれは、外延が同じであるというわれわれの実践的判断を何が真もしくは偽にするのかについての何らかの理論にコミットすることなしに、これらの判断を記述することができる。」¹⁰

2.3 (M) と時を超えて外延が同じであるという実践的な判断との矛盾

エッブスは、前節のような時を超えて外延が同じであるという実践的な判断が (M) と矛盾するということを、彼が第一の思考実験と呼ぶ思考実験によって示そうとする。

この思考実験の歴史的背景として挙げられているのは、18世紀の中頃まで白金は発見されておらず、18世紀中頃でも、白金は金と似ている (金よりも融点は高い

が金と同様に王水（濃硝酸と濃塩酸との混合液）に溶ける）ため〈白い金〉と呼ばれていたということである。つまり、現代では白金と金はそれぞれ原子番号78と79を持つ異なる元素であるにもかかわらず、1650年なら、白金のサンプルは、それを王水に溶かすテストにより金であるとされただろうということである。

これらを歴史的背景として、エッブスの思考実験は、以下のように進む。

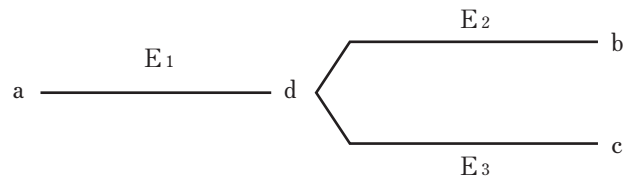
1650年までは地球と区別できない双子地球があり、1650年にその双子地球の南アフリカで白金の大きな堆積が発見される。そして、双子地球の化学者たちによって新しく発見された金属が王水に溶けると証拠立てられ、双子地球の日本語を話す共同体のメンバーは、それを〈金〉と呼び、われわれが金を扱うのと同じやり方でそれを扱う。つまり、白金は金として採掘され、われわれが金を評価するのと同様に双子地球人によって評価され、コインや延べ棒を作るために金と共にハンマーで打たれ溶かされる。双子地球上のすべての人が新たに発見された金属が〈金〉と呼ばれるのが適切だという双子地球の化学者の判断を信じている。双子地球の化学は、双子地球の共同体の化学者が彼らが〈金〉と呼ぶものを探求するとき2種類の〈金〉があると結論すること以外は、われわれの共同体で化学が発達するのと同様全く同じように発展する。われわれは、彼らの〈金〉という語が、対象 x が金、つまり、原子番号79を持つ元素、もしくは、白金、つまり、原子番号78を持つ元素である場合にのみ x について真であると言うことができる。1650年までは、2つの共同体のメンバーは、もし言語的傾向性や心的状態やそれぞれの環境への関係がそれぞれの言語的共同体の未来の発展から独立に記述されるなら、同じ言語的傾向性、同じ心的状態、それぞれの環境への同じ関係を持っている。そのうえ、2つの共同体のメンバーが因果的に関係づけるものの物的構成も同じである。

この思考実験のポイントは、地球上の日本語を話す共同体のメンバーがその発見があったとしても日本語の〈金〉という語の外延は変わらなかったと考えるのと同様に、双子地球の日本語を話す言語共同体のメンバーも双子地球の日本語の〈金〉という語の外延が彼らの発見の後も変わらなかったと考えることである。つまり、発見の前になされた発話を評価するときでさえ、同じ語¹¹〈金〉に違う外延を割り当てているということである。

エッブスは、第一の思考実験についての自分の考えを述べる前に、この第一の思考実験についての標準的な考え方を示す。そのために、彼は、以下のような図を考え

る。

図1¹² 第一の思考実験(1)



エッブスによれば、線 ab は、われわれ日本語を話す共同体における語〈金〉の使用を表しており、線 ac は、双子地球上の日本語を話す共同体における語〈金〉の使用を表している。また、点 d は、双子地球上で大量の白金が偶然発見された1650年を示しており、線 ad は、1650年以前の2つの共同体における語〈金〉の使用を表している。そして、線 ab 、線 ac が線 ad を共有しているということは、1650年以前は2つの共同体における語〈金〉の使用に違いがなかったことを示している。E₁、E₂、E₃ は、それぞれの時点の外延を表している。つまり、語〈金〉の使用がその外延を決定するという考えは、図1の中に組み込まれている。この図と $E_2 \neq E_3$ を認めるなら、枝分かれする前の〈金〉の外延を特徴づける選択肢は、(1) $E_1 = E_2$ 、(2) $E_1 = E_3$ 、(3) $E_1 \neq E_2$ かつ $E_1 \neq E_3$ の3通りだけになる。彼によれば、(1) は受け入れがたい。なぜなら、(1) をとるなら、地球上の場合はいくが、地球上と双子地球上で枝分かれの前には外的環境等には何の違いもないにも関わらず、つまり、枝分かれ前の〈金〉の使用についての何ものわれわれが正しく彼らが間違っていると決定できないように思えるにもかかわらず、双子地球人は間違っていることになるからである。(2) もそれと同様の理由で受け入れがたい。それゆえ、われわれは、(3) という選択肢を選ぶしかなくなる。しかし、そうすると、地球上の場合も双子地球上の場合も、〈金〉に関して、時を超えて外延が同じであるという実践的判断を受け入れられなくなる。このように、彼によれば、(M) と時を超えて外延が同じであるという実践的判断は矛盾するのである。

しかし、エッブスによれば、この場合捨てなければならないのは、実践的判断ではなく、上記の解釈の中で前提されている(M)である。彼は、所与の個人によって使われる任意の語の外延がその人の言語的共同体への関係から独立に記述された言語的傾向性や心的状態によって決定されるという個人主義と所与の時に外延が同じであるという実践的判断が矛盾するということを示す思考実験(第二の思考実験)を使い、所与の時に外延が同じであるという実践的判断が個人主義をうち破るというこ

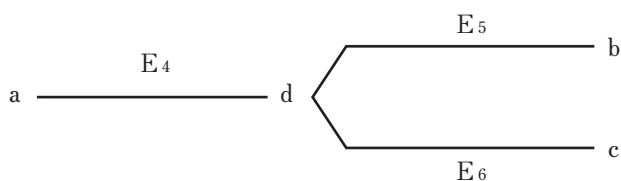
とを示すことによって、それとの類比で、実践的判断ではなく (M) を捨てなければならないということを示そうとする。

2.4 個人主義と所与の時に外延が同じであるという実践的な判断との矛盾とその解決

では、前節の最後で述べた第二の思考実験とはどのようなものだろうか。エッブスは、金の原子番号は知らないが〈金〉という語を最低限には使用できる現代地球人グレンが、白金は含むが金は含まない南アフリカの丘を指さして〈あの丘には大きな金の堆積がある〉と言い、原子番号78か79の元素だけが金であるということを知らなくとも〈金〉という語を最低限には使用できる現代双子地球人グレンが、白金は含むが金は含まない南アフリカの丘を指さして〈あの丘には大きな金の堆積がある〉という場合を想定する。前者の場合、われわれは、現代地球人グレンの言葉を額面通り受け取り、彼があこの丘には大きな金の堆積があると主張したと考える。後者の場合、現代双子地球人グレンの言語共同体のメンバーは、彼の言葉を額面通り受け取り、彼があこの丘には大きな金もしくは白金の堆積があると主張したと考える。もし両言語共同体のメンバーの判断を受け入れるなら、前者の発話は偽で後者の発話は真である。しかし、仮定により、二人の〈使用〉は同じである。つまり、二人の言語的傾向性や心的状況、関係する外的環境への非意味論的關係、因果的に関係づけられるものの物的構成は同じである。

エッブスによれば、この第二の思考実験の図は、次のようになる。

図 2¹³ 第二の思考実験 (1)



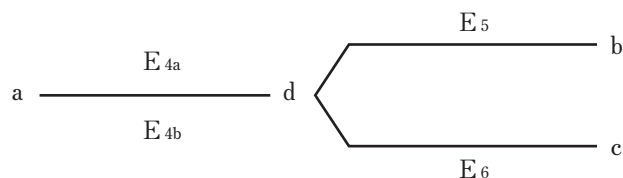
線 ab はグレンの言語共同体における語〈金〉の使用を表しており、線 ac は双子地球人グレンの言語共同体における語〈金〉の使用を表しており、線 ad はそれぞれの言語共同体から独立に考えられた、グレンと双子地球人グレンが語〈金〉に結びつけている傾向性や心的状況等が同じであるという想定を示している。その際、 E_4 はグレンと双子地球人グレンの語〈金〉の外延を、 E_5 はグレンの言語共同体における語〈金〉の外延を、 E_6 は双子地球人グレンの言語共同体における語〈金〉の外延を

表している。この図には、個人主義 (個人の言語的傾向性や心的状態が外延を決めるという考え) が含まれている。この図と $E_5 \neq E_6$ という想定を受け入れるなら、外延についての考え方について三つの選択肢が考えられる。(1') $E_4 = E_5$, (2') $E_4 = E_6$, (3') $E_4 \neq E_5$ かつ $E_4 \neq E_6$ というのがそれである。

エッブスによれば、(1') は、受け入れがたい。なぜなら、(1') を選べば、地球人グレンの言語共同体ではうまくいく。しかし、双子地球人グレンの言語共同体のメンバーは間違っていることになる。けれども、個人主義をとっているかぎり、グレンと双子地球人グレンの語の使用は同じなので、グレンの言語共同体のメンバーが真で、双子地球人グレンの言語共同体のメンバーが間違っているとは言えない。それは (2') の場合も同様である。残る可能性は (3') であるが、それを受け入れるならば、所与の時に外延が同じであるという話者の実践的判断を、地球上の場合も双子地球上の場合も認めることができなくなる。

エッブスは、ここでの問題は個人主義をとるか所与の時に外延が同じであるという実践的判断をとるかであり、普通は後者がとられるのだと主張する。そして、地球人グレンの場合と双子地球人グレンの場合に2つの異なる外延を考え、そのことを次のような図で説明する。

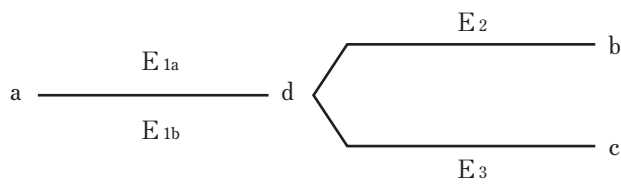
図 3¹⁴ 第二の思考実験 (2)



反個人主義者は、 $E_{4a} = E_5$ であり、 $E_{4b} = E_6$ であり、 $E_5 \neq E_6$ なので $E_{4a} \neq E_{4b}$ であると考えるのである。

2.5 (M) と時を超えて外延が同じであるという実践的な判断との矛盾の解決

前節のように、所与の時に外延が同じであるという実践的判断を重視し、それと矛盾するという理由で個人主義を拒否するのであるとしたら、時を超えて外延が同じであるという実践的な判断と矛盾するという理由で (M) を拒否するべきだというのがエッブスの考えである。彼は、個人主義を拒否するように (M) を拒否するならば、第一の思考実験は次の図で表され、 $E_{1a} = E_2$ であり、 $E_{1b} = E_3$ であり、 $E_2 \neq E_3$ なので $E_{1a} \neq E_{1b}$ であると考えられると言うのである。

図 4¹⁵ 第一の思考実験 (2)

エップスによれば、われわれは他の日本語の話者の言葉を、われわれがそうすることが正当化されるかどうかを特に考えることなしに、額面通り受け取っている。そして、語の外延が同じであると考えている。このことは同時代の人に限ったことではない。昔の人の場合も同様である。たとえば、語の外延が変わることがあり昔に書かれたものを額面通り受け取ることが間違いだという場合があるとしてもそうである。われわれは、引用解除のパターン (E) を適用できるのである。彼によれば、額面通り受け取り、引用解除のパターン (E) を適用するならば、たとえ何が外延を決定するかについての理論がないとしても、外延が同じであると判断しているということになるのであり、(M) と矛盾するとしても、(M) を放棄することによって、外延が同じだという判断を受け入れるべきなのである。

しかし、(M) を放棄するからといって、言語の使用が外延が同じであるというわれわれの実践的判断と無関係であると言っているのではないとエップスは主張する。外延が同じであるというわれわれの実践的な判断は、言語を話す能力の一部であり、額面通り受け取って良い場合とそうでない場合を区別する能力も含んでいる。相手があまりに違った形で語を使っているならば、額面通り受け取らない。そのことは、語の使用が外延が同じであるという実践的判断の手がかりになっていることを示している。ただし、彼によれば、実践的判断と言語の使用がどのように関係しているかについての理論は必要ないのである。

2.6 相手の言うことを額面通り受け取ることと同意・不同意¹⁶

今まで『時を超えた外延の同一性という考えそのもの』に沿って見てきたように、エップスは時を超えて外延が同じであるという実践的な判断を重要視する。そして、彼がそのような実践的判断を重要視することの背景には、彼の別の論文『真理と間理論的な術語』で言われているように、それによって話者間の同意や不同意、主張の評価、論争の解決ということが可能になるという考えがある。クワインのデフレ理論に反対するパトナムの議論を間理論的な (trans-theoretical) 術語 (われわれの

信念が根本的に変化してもその指示が同じものとして残っているような術語) の取り扱いに対する批判として再構成し間理論的な術語を認めたいというデフレ理論を提案することを主目的としているその論文の中で、エップスは、外延が同じであると実践的に判断することは間理論的な術語を認めることであり、それによって同意や不同意、主張の評価、論争の解決というわれわれの実践を認めることができると述べているのである。

間理論的な術語を認めないために同意や不同意を認めることに失敗している例としてエップスが挙げているのが、クワインの翻訳の不確定性 (indeterminacy of translation) のテーゼである。ここでは、そこで言われているクワインの翻訳の不確定性とはどのような考えであるかを確認しておきたい。¹⁷

クワインは、翻訳の問題を考える際に、唯一のデータが現地の人の発話と外的に観察できる状況だけであるような根本的翻訳をしようとしているフィールド言語学者を考える。彼によれば、このような言語学者は行動主義者でなければならない。行動主義的な立場をとり、先のデータから推測によって翻訳のマニュアルを構成することによって翻訳をしていくのである。そして、このとき手がかりとなるのが、観察文 (発話直後に同意・不同意を表明できる文¹⁸であり、その場で目撃している言語能力のある人みんなが同じ意見であるという意味で間主観的な文であり、状況が変われば文の真偽も変わるという意味で場面文) である。彼の考える言語学者は、現地の人の発話とその発話が発せられたときに観察される状況を仮に結びつけ、観察される状況が同じ場合には自分がその状況に対する観察文だと思ふ文を発話し、それに対する現地の人の同意・不同意を調べる。そして、それを繰り返すことにより現地語と母国語を結びつけていく。もちろん、翻訳のマニュアルを構成する際、観察文にとどまっているわけではなく、母国語の〈かつ〉や〈または〉などの論理的な語を手がかりに得られた観察文から他の観察文をつくり、それを実地で試したり相手の知覚的状况に感情移入しながら、観察文のなかに出てきた断片を手がかりに、観察された状況とまったく結びついていないような文を理解していこうとする。そのようにして、彼の考える言語学者は分析仮説をつくっていくのである。

クワインによれば、このようにして分析仮説がつくられていく際に重要なのは、コミュニケーションの成功である。なぜなら、たとえば、観察文が、一人の人をとった場合、その文と関係づけられた刺激の範囲として同意をもたらす肯定的刺激意味と不同意をもたらす否定的刺激

意味を持っているとしても、受容器が人によって異なるため観察文で共有されているものを刺激意味と考えることには問題があり、それゆえ、刺激の間主観的な類似ということを考えないですまさないからである。そのように、二つの観察文の類似はコミュニケーションの成功のなかにあり、コミュニケーションにおける成功は会話がスムーズにいくということと交渉が成功するということによって見て取れるというのが彼の考えである。そして、彼によれば、この会話がスムーズにいき交渉が成功するというコミュニケーションの成功は、観察文だけでなく観察文を手がかりにつくられた翻訳のマニュアルが適切かどうかを調べる際にも大きな役割を演じるのである。

以上のように考えるならば、翻訳のマニュアルを構成する際、コミュニケーションの不成功が起こった場合、与えられたデータとコミュニケーションの成功という条件を満たすような改訂ならどんなものでも受け入れられるということになる。このような考えが、クワインの言う翻訳の場合の全体論 (holism) である。

翻訳に関して、上記のような全体論の立場をとるならば、翻訳の不確定性ということが生じる。クワインによれば、翻訳の不確定性のテーゼとは、「根本的翻訳をする二人の人のマニュアルはそれが予測する現地の人の行動に関しては区別できない一方で、それぞれのマニュアルはもう一方の翻訳者ならば拒否するかもしれないような翻訳を指定することがありうる」¹⁹ということである。

そして、そのような不確定性は、文より小さい単位に関してあてはまる。それが指示に対して述べられるなら、それは指示の不確定性 (indeterminacy of reference) になる。クワインが指示の不確定性に関してどのように考えているかは、彼の有名な例〈ガバガイ〉を見るとわかりやすい。

クワインによれば、〈ガバガイ〉とは、根本的翻訳をしているとき現地の人が発する一語文である。現地の人が〈ガバガイ〉と発するのは、われわれが〈うさぎ〉という一語文を発したいようなときである。根本的翻訳をしている言語学者は、何度も試行錯誤したうえで、現地語の〈ガバガイ〉という観察文と母国語の〈うさぎ〉という観察文が刺激同義的であると考えようになるが、それだけでは相手の言語を観察文以外に広げていくことはできず、分析仮説をつくらなければならない。分析仮説をつくる際の一つの仕事は、文ではなく単語を考えることである。たとえば、〈ガバガイ〉という一語文の〈ガバガイ〉を一つの名辞として考えようとする考えが出てくる。しかし、〈ガバガイ〉と〈うさぎ〉という観

察文同士の翻訳に何の問題がないとしても、〈ガバガイ〉という名辞と〈うさぎ〉という名辞の外延が同じだとは言えない。なぜなら、うさぎが現れたときそのうさぎを直接指さして示し〈ガバガイ〉と言うことによって〈ガバガイ〉の外延である指示を決定しようとしたとしてもうまくいかないからである。なぜなら、うさぎが見えているときは必ず〈うさぎの諸相〉や〈うさぎのすべての分離されていない雑多な部分〉も見えているからである。〈ガバガイ〉は、〈うさぎ〉かもしれないし、〈うさぎの諸相〉かもしれないし、〈うさぎのすべての分離されていない雑多な部分〉かもしれない。そして、それらの候補のどれにするかを決める際には、構造的、文脈的な特徴が問題になるのである。

以上のように、全体論をとるならば、文に関しても指示に関しても不確定性が言える。特に、指示の不確定性に注目するならば、間理論的な術語は認められなくなる。同じ語を使っている、同じものを指示しているとは言えなくなる。エッブスによれば、クワイン流に考えるなら、行動主義的な意味を超えた同意や不同意が言えなくなるのである。

エッブスは次のように言っている。「真理と指示についてのクワインのデフレの見解に対するパトナムの中心的反論の教訓は、『デフレ理論では、・・・世界についてのある主張は (単に主張可能、もしくは、正当化可能ではなく) 真であるという当たり前のことを適切に扱うことができない』というものではなく、同意や不同意のわれわれの実践的な特徴付けを理解するためには、他の話者の語を額面通り受け取っているというわれわれの実践を、われわれの言語の語として何を見なすかについての、また、われわれの語が何を指示するかについてのわれわれの理解と調和させる必要があるということである。この実践は、われわれの言語における間理論的な術語の存在へのコミットメントになる。私は、同意や不同意のわれわれの実践的な特徴付けを理解するために、また、それに対応するわれわれの言語における間理論的な術語の存在への実践的なコミットメントを理解するために、指示が同じであるという実践的な判断を信じる必要があるということ論じた。」²⁰

2.7 エッブスの議論の構造

以上見てきたように、エッブスは、個人主義と所与の時に外延が同じであるという実践的な判断が矛盾するということを認め、かつ、その際個人主義を捨てることを選ぶならば、語の使用がその外延を決定するという形而上学的原則 (M) と時を超えて外延が同じであるという

実践的な判断とが矛盾するということを認め、かつ、その際 (M) を捨てることを選ぶべきだと論じている。そして、(M) を捨てることができるのは、時を超えて外延が同じであるという実践的な判断を、何らかの理論にコミットすることなく理解できるからだと言っている。彼によれば、外延が同じであるという実践的な判断をしているということは、引用解除パターン (E) (x が ___ であるときにのみ、' ___ ' は x について真である) を適用しているということなのである。そして、引用解除パターン (E) を適用するのは、われわれが相手の言うことを額面通り受け取っている場合であり、実際われわれが相手と会話しているとき、それが直接的にであれ、書物などを通して間接的にであれ、われわれは相手の言うことを額面通り受け取っているのであると主張するのである。このような (M) を捨てて選ばれるべき、外延が同じであるという実践的な判断こそ、個々の語が同じ外延を持っているかどうかを判断するための究極的なパラメータであり、同じ外延を持っていると考えるからこそ会話相手の主張に同意したりしなかったりできるというのが、彼の考えなのである。

3. エッブスの考えの問題点

3.1 着目点

今まで述べてきたようなエッブスの考えには、問題がないのだろうか。彼に同意し、時を超えて外延が同じであるという実践的な判断と語の使用がその外延を決定するという形而上学的原則 (M) が矛盾するとき、前者を維持し、後者を捨てることができるのだろうか。しかし、それについて結論を出すためには、まだ考察が必要である。ここでは、彼の議論を三つの個所に分け、それぞれにおいてどのようなことが問題になりうるかを述べる。一つは、〈個人主義と所与の時に外延が同じであるという実践的な判断が矛盾するということを認め、かつ、その際個人主義を捨てることを選ぶならば、語の使用がその外延を決定するという形而上学的原則 (M) と時を超えて外延が同じであるという実践的な判断とが矛盾するということを認め、かつ、その際 (M) を捨てることを選ぶべきだ〉という類比が行われているところである。もう一つは、〈外延が同じであるという実践的な判断をしているということは、引用解除パターン (E) を適用しているということであり、引用解除パターン (E) を適用するのは、われわれが相手の言うことを額面通り受け取っている場合である〉という考えである。そして最後は、〈外延が同じであるという実践的な判断

が、個々の語が同じ外延を持っているかどうかを判断するための究極的なパラメータであり、同じ外延を持っていると考えるからこそ会話相手の主張に同意したりしなかったりできる〉という個所である。

3.2 類比

まず、〈個人主義と所与の時に外延が同じであるという実践的な判断が矛盾するということを認め、かつ、その際個人主義を捨てることを選ぶならば、語の使用がその外延を決定するという形而上学的原則 (M) と時を超えて外延が同じであるという実践的な判断とが矛盾するということを認め、かつ、その際 (M) を捨てることを選ぶべきだ〉という類比について考えてみよう。

ここでも、いくつかの個所に分けて論ずることは役に立つ。

第一に、上記の類比全体が問題になる。しかし、これに関しては、エッブスのわかりやすい分析によって、前件を認めるならば後件も認めなければならないということは明らかにされたと思われる。彼の主張がこのような弱い主張に止まっているならば、何の問題もないだろう。けれども、もし彼が主張したいことが、時を超えて外延が同じであるという実践的な判断を認めたいという、より強い主張であるならば、類比の内容の検討に入っていかなければならない。

したがって、第二に、個人主義と所与の時に外延が同じであるという実践的な判断が矛盾するということを認めるかどうか、また、語の使用がその外延を決定するという形而上学的原則 (M) と時を超えて外延が同じであるという実践的な判断が矛盾するかどうかという問題が生じる。しかし、これに関しても、私は、それらの矛盾を示して見せているエッブスの議論は成功していると思う。しかし、だからといって、類比の内容すべてに問題がないというわけではない。

そのように、第三に、個人主義と所与の時に外延が同じであるという実践的な判断が矛盾するとき人は個人主義を捨てるのかという問題がある。個人主義を捨て所与の時に外延が同じであるという実践的な判断を認めるからこそ、類比によって、時を超えて外延が同じであるという実践的な判断を認めるということに実質的な意味があるのである。

しかし、これに関しては、前者二つのように簡単には行かない。個人主義を捨て所与の時に外延が同じであるという実践的な判断を認めるには、何らかの根拠が必要だからである。けれども、エッブスは、そのための根拠をはっきりとは述べていない。確かに、彼は、反個人主

義者は常識を受け入れているのだと言っている。²¹また、所与の時に外延が同じであるという実践的な判断を認めることは、所与の時の相手の話者の語を額面通り受け取ることであり、相手の話者の語を額面通り受け取る人がその言語共同体のメンバーであるという前提があるのだと述べている。²²つまり、所与の時に外延が同じであるという実践的な判断を受け入れること、言い換えれば、相手の話者の語を額面通り受け取ることが常識であり、そうしているからこそ、われわれは同じ言語共同体のメンバーであると認められるのだと言うのである。

けれども、ここには、相手の話者の語を額面通り受け取ることが常識かどうかという問題がある。先に述べたように、エップスも、われわれが常に相手の言うことを額面通り受け取っているわけではないということは認めている。彼は、相手が自分とあまりに違った形で語を使っているならば、額面通り受け取らないと考えていた。だからこそ〈無反省〉という言い方をしていたのである。だとしたら、額面通り受け取ることが常態であり、額面通り受け取らないことも起こりうると考える根拠はどこにあるのか。相手の話者の語を額面通り受け取らない場合を優先する立場も考えられるのである。その立場の一つとして考えられるのが、デイヴィドソンに代表されるようなチャリティの原理²³である。チャリティの原理によれば、相手の話者の語をその話者の文が真になるような仕方で解釈することになる。

エップスもそのチャリティの原理が額面通り受け取ることと矛盾するということを認めている。そして、認めようとして、「もしあなたがブナの木を見ているとき、あなたの友達が『見ろ、すてきなニレだ』と言うなら、あなたは解釈の問題に直面するだろう。一つの自然な可能性は、あなたの友達がブナをニレと間違えて誤った信念を形成したというものである。しかし、彼の目がよく視線が適切なら、彼が『ニレ』という語を自分が使うのと同じようには使っておらず、葉っぱの形やその木の樹皮の色や模様について間違ったわけではないとする方がより適切に思えさえする」²⁴と言うのは、われわれの常識に照らし合わせて変だと言うことによって、額面通り受け取る方を取ろうとするのである。彼によれば、われわれは、普通、語の話者の使用をその話者がそれを正確に適用していないときでさえ額面通り受け取っているのである。しかし、チャリティの原理の側に立って言えば、「もしあなたがケッチが帆走するのを見ているとき、あなたの友達が『見ろ、すてきなヨールだ』と言うなら、あなたは解釈の問題に直面するだろう。一つの自然な可能性は、あなたの友達がケッチをヨールと間違えて誤っ

た信念を形成したというものである。しかし、彼の目がよく視線が適切なら、彼が『ヨール』という語を自分が使うのと同じようには使っておらず、通り過ぎるヨットの補助帆の位置について間違ったわけではないとする方がより適切に思えさえする」²⁵ということになるのである。ここにあるのは、ブナとニレかケッチとヨールかという違いだけである。²⁶常識を根拠にするならば、係争している事柄について何が常識かという問題は避けられないものとなるだろう。

3.3 額面通り受け取ること

次に、〈外延が同じであるという実践的な判断をしているということ〉は、引用解除パターン (E) を適用しているということであり、引用解除パターン (E) を適用するのは、われわれが相手の言うことを額面通り受け取っている場合であるという考えを見てみよう。ここで、相手の言うことを額面通り受け取っているときにはわれわれは引用解除パターン (E) を使っているということにも、引用解除パターン (E) を使っているとき外延が同じであるという実践的な判断をしているということにも問題はないだろう。ここでも問題になるのは、本当にわれわれは相手の言うことを額面通りに受け取っているのかということである。前節で述べたように、ある話者がある文を真と考えているなら割り当てられた解釈のもとでその文が真になるような仕方でその話者を解釈するというチャリティの原理を主張する立場もあるのである。

所与の時に外延が同じであるという実践的な判断に関する額面通り受け取ることについて前節で述べたことは、時を超えて外延が同じであるという実践的な判断に関する額面通り受け取ることにも当てはまる。時を超えた場合にわれわれが相手の言うことを額面通りに受け取っていると考えれば、1650年の〈金〉の外延も現在の〈金〉の外延と同じであるということになり、1650年にロックが白金の堆積のある丘を指さして〈あの丘には大きな金の塊がある〉と言った場合、ロックが間違っていたことになるのである。けれども、別の立場も考えられる。〈あの丘には大きな金の塊がある〉とロックが言ったとき、〈ロックの時代の金という語は、白金をも指示していたとも考えられるのだから、ロックの言ったことは正しい〉とする立場も考えられるのである。そのように、ここでも、係争している事柄について何を常識と考えるかという問題は解決されずに残っているのである。

3.4 同意・不同意

〈外延が同じであるという実践的な判断が、個々の語が同じ外延を持っているかどうかを判断するための究極的なパラメータであり、同じ外延を持っていると考えるからこそ会話相手の主張に同意したりしなかったりできる〉という点に関してはどうだろうか。

ここには、大きな前提がある。つまり、われわれが会話の相手の主張に同意したりしなかったりできるという実践を重視しようという前提がある。もしここで、クワインの根本的翻訳に見られるような行動主義的な同意・不同意以上の意味を持つ同意・不同意という実践を捨てるなら、個々の語が同じ外延を持っているということが言えなければならないということもなくなり、外延が同じであるという実践的な判断が重要だという考えも必要なくなるのである。だとしたら、同意・不同意という実践が重要だということは、どのようにして言うことができるのだろうか。はっきりとは言われていないが、ここでも、根拠は、われわれが実際にそうしているということであると思われる。それゆえ、ここでも、係争している事柄について何を常識と考えるかということが問題として残っているのである。

4. エッブスの考えの中に見られる重要な視点

以上見てきたように、〈個人主義と所与の時に外延が同じであるという実践的な判断が矛盾するということを認め、かつ、その際個人主義を捨てることを選ぶなら、語の使用がその外延を決定するという形而上学的原則(M)と時を超えて外延が同じであるという実践的な判断とが矛盾するということを認め、かつ、その際(M)を捨てることを選ぶべきだ〉というエッブスの主張を、前件を認めるならば後件も認めなければならないという弱い意味での主張であると考えれば、彼の主張は正しい。しかし、もし時を超えて外延が同じであるという実践的な判断を積極的に取りたいという、より強い主張をしたいのならば、彼の考えには問題がある。そして、その問題とは、相手の話者の言うことを額面通り取ることを常識的なことと考えるかどうか、同意・不同意の必要性を常識的なことと考えるかどうか、つまり、係争している事柄について何を常識と考えるかというものである。

しかし、そのような問題があるにもかかわらず、哲学的な問題を考える際に、われわれの実践や常識を重要視し、哲学の問題を解くための根拠としようとする考えには意義があると私は考える。このような考えは、エッブ

スだけでなく、パトナムの自然な実在論という考えの中でも見られたものである。パトナムによれば、自然な実在論とは、外的対象を知覚するときわれわれが知覚しているのは外的対象自体ではなくその知覚的な経験、インターフェースであるという考えを棄て、正常な知覚作用の対象は外的対象によってわれわれの主観性に引き起こされた何らかのものではなく外的なものだと考えるものである。彼は、自然な実在論という立場を取ることにによって、先に見たような指示の不確定性の問題を避けることができるとするのである。²⁷

では、なぜ、問題があるにもかかわらず、われわれの実践や常識を重要視しようとする立場に意義があると言えるのだろうか。それは、その考えの根本には、問題を論争相手との異論が少ないところへ持ってきて同じ出発点から物事を考えようという視点があるからである。先にも述べたように、係争している事柄について何を常識とするかをめぐっては問題がある。その点で相違していたなら、相手に自分の意見を認めさせることはできない。エッブスの場合のように、弱い意味での主張を納得させることができたとしても、強い意味での主張を納得させることができない。しかし、だからこそ、論争相手とより共有できそうなもの、われわれの実践や常識を議論の出発点としようというのである。エッブスの場合も、(M)の拒否を認めない人でも個人主義の拒否は認めるだろう、もしそれを認めてくれるなら、自分の結論も認めてくれるだろうという議論になっているのである。

しかし、だからといって、常識の問題が解決されるわけではない。では、どのようにして常識の問題を解決できるのだろうか。先にエッブスの議論の問題点について述べたことを思い出そう。時を超えて外延が同じであるという判断にも所与の時に外延が同じであるという判断にも、さらにはわれわれが同意・不同意という実践を行っているということにも、何が係争している事柄についての常識かという問題が伴われていた。しかし、時を超えて外延が同じであるという判断より、所与の時に外延が同じであるという判断の方がより常識に近いように思える。また、(M)を拒否する例よりも個人主義を拒否する例の方が納得のいくものに思える。そして、それら以上に、同意・不同意ができるはずだということは常識的に思える。このような状況のもとで、係争している事柄について常識が何かという問題を考える際に、すべての人が常識だと思うものという強い要請をあきらめることもできるはずである。哲学的論争では、すべての可能性を網羅して絶対に間違いのない確実なことを言いた

いという考えはかなり強固に残っている。しかし、それに固執する必要はないのである。そうするならば、たとえばエッブスの場合、すべての人に対しては無理であるとしても、かなりの人に対して、時を超えて外延が同じであるという実践的判断を認め語の使用がその語の外延を決定するという形而上学的原則 (M) を捨てなければならないということを納得させることができるはずである。論争相手との共通基盤としての常識という意味で常識を捉えることによって、たとえ絶対的なことは言えないとしても、間主観的なことを認めることはでき、常識を手がかりにさまざまな問題に答えることができるだろう。もちろん、このことは簡単な見取り図に過ぎず、それを内容あるものにするためにはさらなる考察が必要である。しかし、そのことは今後の課題とし、ここでは、問題があるにも関わらず常識を問題解決の根拠にできると考えるための一つの方法を示唆することに留めたい。

5. おわりに

この論文では、エッブスの『真理と間理論的な術語』や『時を超えた外延の同一性という考えそのもの』に沿いながら、時を超えて外延が同じであるという判断を持ち続けるためには語の使用がその語の外延を決定するという形而上学的原則 (M) を捨てなければならないという彼の議論と、同意・不同意のためには外延が同じであるという実践的な判断が必要であるという考えとその議論との関係を見てきた。そして、それらの点に関して彼の議論の構造を明らかにしたうえで、彼の考えのどこに問題があるのかを指摘した。その問題とは、相手の話者の言うことを額面通り取るということを常識的なことと考えるかどうか、同意・不同意の必要性を常識的なことと考えるかどうかというものであり、それらの問題は、一般に、係争する事柄について何を常識と考えるかという問題になるのであった。しかし、私の見解によれば、それらの問題にもかかわらず、彼の考えには重要な点がある。それは、その考えの根本にある、問題を論争相手との異論が少ないところへ持っていき同じ出発点から物事を考えようという視点である。われわれは、常識に依拠して哲学的問題に答えようとする際に、すべての人が常識だと思うものという強い要請をあきらめることもできるはずである。そして、そうすることによって、常識を手がかりにさまざまな問題に取り組むことができるのである。

注

- (1) 知識は、哲学においては、普通、正当化された真なる信念と考えられる。しかし、ここでは、より日常に近い言い方として、知識という語を間違った知識という言い方も認めるようなもっと広い意味(哲学的には、信念と呼ばれることが多い)で使う。
- (2) この例は、日本経済新聞社編. 20世紀 日本の経済人. 東京, 日本経済新聞社, 2000, p. 60. からのものである。ただし、そのままの引用ではない。
- (3) Ebbs, G. "Truth and Trans-theoretical Terms". Hilary Putnam: Pragmatism and Realism. Conant, J.; Zeglen, U. M., ed. London & New York, Routledge, 2002, p. 167-185. エッブスは、イリノイ大学の哲学の助教授で、言語哲学、論理学の哲学、心の哲学、分析哲学の歴史が専門の哲学者。彼のパトナム解釈をパトナム自身認めている。Putnam, H. "Comment on Gary Ebbs's paper". Hilary Putnam: Pragmatism and Realism. Conant, J.; Zeglen, U. M., ed. London & New York, Routledge, 2002, p. 186-187.
- (4) 古いところでは、Putnam, H. "The Meaning of 'Meaning' ". Mind, Language and Reality. Cambridge, Cambridge University Press, 1975, (Philosophical Papers, Volume 2), p. 215-271. やもっと最近では、Putnam, H. Word and Life. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1994. 収録の諸論文の中に見て取れる。パトナムは、心の哲学、科学哲学、言語哲学を主な関心領域とするアメリカの哲学者。
- (5) Ebbs, G. The Very Idea of Sameness of Extension across Time. American Philosophical Quarterly. vol. 37, no. 3, 2000, p. 245-268.
- (6) この章では、特に断らないかぎり、Ebbs, G. The Very Idea of Sameness of Extension across Time. に沿って論を進める。
- (7) Ebbs, G. "Truth and Trans-theoretical Terms". では、それぞれ、所与の時に指示が同じであるという実践的な判断 (a practical judgment of sameness of denotation at a given time)、時を超えて指示が同じであるという実践的な判断 (a practical judgment of sameness of denotation across time) となっているが、エッブス自身、その論文でそれらの判断について述べているとき、Ebbs, G. The Very Idea of Sameness of Extension across Time. を参照するよ

- う述べているので、本論文ではどちらも同じものとして扱う。また、Ebbs, G. *Rule-Following and Realism*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1997. では、指示を表すために reference という語も使われている。
- (8) Ebbs, G. *The Very Idea of Sameness of Extension across Time*. p. 245-246.
- (9) *ibid.* p. 245.
- (10) *ibid.* p. 248. ここでは、わかりやすくするため、English を日本語と訳している。以下の説明についても同様である。
- (11) このような説明をする際、エップスは、語の指示内容ではなく形に注目していることがわかりやすいように、語型 (word-form) という語を使っている。しかし、この論文で説明している範囲では語 (word) という語を使っても混乱は起きにくいと思われるという理由と、論文を通して同様の意味で語形という語と語という語が混淆しているのはわかりにくいと思われるという理由のため、ここでは、語形という語を使わずに、一律に語という語を使用する。
- (12) Ebbs, G. *The Very Idea of Sameness of Extension across Time*. p. 250. 引用された図につけたタイトルは筆者による。以下の引用された図についても同様である。
- (13) *ibid.* p. 253.
- (14) *ibid.* p. 254.
- (15) *ibid.* p. 255.
- (16) この節でのエップスの考え方の説明については、主に Ebbs, G. "Truth and Trans-theoretical Terms". に沿い、Ebbs, G. *Rule-Following and Realism*. を参照している。
- (17) Quine, W. V. O. *Word and Object*. Cambridge, Massachusetts, MIT Press, 1960. , Quine, W. V. O. "Ontological Relativity". *Ontological Relativity and Other Essays*. New York, Columbia University Press, 1969, p. 26-68. , Quine, W. V. O. *Pursuit of Truth*. rev. ed. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1992. 参照。
- (18) クワインの同意・不同意は assent および dissent で表され、より実質的な意味での同意・不同意は、agree および disagree で表される。
- (19) Quine, W. V. O. *Pursuit of Truth*. p. 47-48.
- (20) Ebbs, G. "Truth and Trans-theoretical Terms". p. 184-185. 斜自体原著。
- (21) Ebbs, G. *The Very Idea of Sameness of Extension across Time*. p. 254. 参照。
- (22) *Ibid.* p. 266. 参照。
- (23) Davidson, D. *Inquiries into Truth and Interpretation*. Oxford, Clarendon Press, 1984. 参照。
- (24) Ebbs, G. *The Very Idea of Sameness of Extension across Time*. p. 261. 斜字体原著者。
- (25) Davidson, D. "On the Very Idea of a Conceptual Scheme". *Inquiries into Truth and Interpretation*. Oxford, Clarendon Press, 1984, p. 196.
- (26) エップスは、このデイヴィッドソンからの引用を示したうえで、デイヴィッドソンの例がもっともらしく思えるのはヨールという語を適切に使える人がそれほど多くないからだと言い、プナとニレのような普通の場合には、常識的にはチャリティの原理をとらなないと主張している。しかし、この二つの比較で常識に関する問題に決着がつくとは思えない。
- (27) Putnam, H. "Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind". *The threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999, p. 3-70. 参照。

参考文献

- Conant, J. ; Zeglen, U. M. , ed. *Hilary Putnam: Pragmatism and Realism*. London & New York, Routledge, 2002.
- Davidson, D. *Inquiries into Truth and Interpretation*. Oxford, Clarendon Press, 1984. (抄訳として、Davidson, D. (野本和幸, 植木哲也, 金子洋之, 高橋要訳) 真理と解釈. 東京, 勁草書房, 1990.)
- Davidson, D. "On the Very Idea of a Conceptual Scheme". *Inquiries into Truth and Interpretation*. Oxford, Clarendon Press, 1984, p. 196. (Davidson, D. (植木哲也訳) "概念枠という考えそのものについて". 真理と解釈. 野本和幸, 植木哲也, 金子洋之, 高橋要訳, 東京, 勁草書房, 1990, p. 192-213.)
- Ebbs, G. *Rule-Following and Realism*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1997.
- Ebbs, G. "Truth and Trans-theoretical Terms". *Hilary Putnam: Pragmatism and Realism*. Conant, J. ; Zeglen, U. M. , ed. London & New York, Routledge, 2002, p. 167-185.
- Ebbs, G. *The Very Idea of Sameness of Extension across Time*. *American Philosophical Quarterly*. vol. 37, no. 3, 2000, p. 245-246.

- 日本経済新聞社編. 20世紀 日本の経済人. 東京, 日本経済新聞社, 2000.
- Putnam, H. *Mind, Language and Reality*. Cambridge, Cambridge University Press, 1975, (Philosophical Papers, Volume 2).
- Putnam, H. "The Meaning of 'Meaning' ". *Mind, Language and Reality*. Cambridge, Cambridge University Press, 1975, (Philosophical Papers, Volume 2), p. 215-271.
- Putnam, H. *Word and Life*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1994.
- Putnam, H. *The threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999.
- Putnam, H. "Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind ". *The threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999, p. 3-70.
- Putnam, H. "Comment on Gary Ebbs's paper". *Hilary Putnam: Pragmatism and Realism*. Conant, J. ; Zeglen, U. M. , ed. London & New York, Routledge, 2002, p. 186-187.
- Quine, W. V. O. *Word and Object*. Cambridge, Massachusetts, MIT Press, 1960. (Quine, W. V. O. (大出晃, 宮舘恵訳) ことばと対象. 東京, 勁草書房, 1984.)
- Quine, W. V. O. *Ontological Relativity and Other Essays*. New York, Columbia University Press, 1969.
- Quine, W. V. O. "Ontological Relativity ". *Ontological Relativity and Other Essays*. New York, Columbia University Press, 1969, p.26-68.
- Quine, W. V. O. *Pursuit of Truth*. rev. ed. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1992. (Quine, W. V. O. (伊藤春樹, 清塚邦彦訳) 真理を追って. 東京, 産業図書, 1999.)